

Bookstart Newsletter



2018
冬
No.59

ブックスタート・ニュースレター



大阪府泉南市

特集

子どもを尊重する視点を大切に

～大阪府泉南市の取り組みから～

生まれたばかりの赤ちゃんは、生活のあらゆる場面で、保護者や周りの大人たちからのお世話を必要とします。自分では食べることも、服を着ることも、気持ちを言葉で表すことも難しいからです。とはいえ赤ちゃんは、独立した一人の人間として尊重されるべき存在でもあります。

今回取材した大阪府泉南市では、2012年に子どもの権利に関する条例を制定。「子育て」と「子育て」を社会で支える仕組みを整えることで、子どもにやさしいまちづくりを目指してきました。

その思いは、ブックスタートや子育て支援にも通じています。子どもの幸せを第一に考え、だからこそ保護者への支援にも注力する泉南市の実践は、私たちに活動の意義を、新たな視点から考えさせてくれるように思います。

ケーススタディ
大阪府泉南市

ブックスタートを実施しているのは4か月児健診。問診を終えた親子が会場に入ると、図書館員とボランティアが、笑顔で出迎えます。

主役は赤ちゃん

「お名前教えてくれる？お母さんに聞いてもいいかな？」。泉南市のブックスタートでは、こんな赤ちゃんへの問いかけから、親子との会話が始まります。まずは主役である赤ちゃんに話しかけることを大切にしているのです。上の子が一緒に来ている時は、ボランティアがしゃがみこんで、その子の目線に合わせて話をするようにしています。

健診は、保護者にとって意味があるだけでなく、子ども自身の権利として自らの健康を診てもらう場でもあります。そのように考えると、スタッフはいくら忙しくても、保護者だけに話しかけるのではなく、赤ちゃんに対して「こんにちは」と言う必要がありません。赤ちゃんにも丁寧に声をかける泉

南市のブックスタートは、子ども一人ひとりを大事に思う気持ちを体現した取り組みなのです。

保護者の頑張りを感じてほしい

受容される心地よさを感じてほしい

ボランティアが絵本を読むと、笑ったり絵本を食い入るように見たりする我が子の様子を、保護者がほほえみながら見つめます。そんなひとときは保護者にとって、我が子を大事に扱ってもらう嬉しさを感じられる時間になるのではないのでしょうか。何よりも、赤ちゃんは絵本でコミュニケーションをとる楽しさを、保護者に伝えることができます。そして家庭の中で実際に絵本が読まれたら、赤ちゃんにとって大切な、保護者と心を通わせる時間がひとつ増えることにもなるのです。

また、保護者の中には「親なのだから自分がやって当たり前」という思いから、育児の負担をいつの間にか一人で抱え込んでしまう人もいます。頑張っていることを、認められる機会も少ないかもしれません。

しかしブックスタートでは、ボランティアが赤ちゃんをあやしむながら、「よく頑張ってるね」と声をかけるなど、

見えてきた課題を話し合う中で、ボランティアから「親子に案内している子育て支援センターを実際に見ておきたい」という意見が出されたことも。その際には、図書館と保育子育て支援課が協力し、見学会を行いました。ボランティアが現場を見ただけにより、ブックスタートで親子に説明しやすくなっただけでなく、子育て支援の現状を詳しく知る機会にもなりました。

また全体会では、子どもに関する関係者の知識を底上げする機会も作っています。外部から講師を招くだけでなく、図書館からは赤ちゃん絵本について、保健師からは赤ちゃんの発達について、保育子育て支援課からは市の子育て支援の現状について話す自前の勉強会も開催。様々な立場の人たちが協力しているからこそ、各分野の専門知識を共有することができています。

絵本を読む時間について
保育士の認識を深める

赤ちゃんは保護者のふれあいの時間は、あたたかな親子関係を築く上で、とても大切なものです。ブックスタートでは、絵本を通じてそうしたひとときを持つきっかけを届けます。

子育て応援団が
地域と親子をつなぐ

保育子育て支援課は、この点に着目。子育て支援としても重要な意味を持つと感じ、事業の意義を現場の保育士にも知ってほしいと考えました。そこで、家庭で絵本を読む時間について学ぶ講座を各保育園で開催。絵本は教材ではなく、親子が向き合うためのコミュニケーションツールであることを伝えました。保護者に直接関わる保育士が本への認識を深め、ブックスタートを理解することは、絵本を介した親子のふれあいを家庭に浸透させる意味もあると考えています。

子育て支援の市民ボランティアである「子育て応援団」には、子育て支援センター利用者で子どもの手が離れた現役ママのほか、元保育士などのベテラン世代も所属しています。現役ママは、同世代の先輩として保護者の身近な相談相手に。資格を持つベテラン世代はブックスタートにも関わるほか、見守りが必要な家庭への訪問を行うなど、専門知識を活かして活動しています。こうした取り組みは、地域と親子の大切な接点にもなっています。

自然な形で保護者の苦勞をねぎらいます。ちょっとした育児の気がかりを、「うちの子、こんなやねんけど……」と保護者がこぼした時には、話を聞いて、保健師や保育士などの専門スタッフや、相談窓口のある子育て支援センターを案内することもあります。その場にいるスタッフが「近所のおばちゃん」に徹し、気軽に話せる雰囲気を作り出すことによって、ブックスタートでの子育て相談にもつながっているのです。そうした場が保護者自身にとって、肯定的に受容される心地よさを感じる機会になればと考えています。

子育て支援者ネットワークを構築

「子どもの幸せを第一に」という考え方は、分野を越えて浸透しています。「子育て支援は担当部署だけがやって



①ボランティアが、読みきかせと資料の説明を担当します。赤ちゃんを囲んで、会場で笑顔がひろがります。



②読みきかせが終わると絵本を手渡すコーナーへ。再度絵本を楽しむ親子もいます。

いるのではない」。泉南市では、こうした思いを持つ保育子育て支援課が旗振り役となり、公・民間問わず、子育て、福祉、教育の各分野を集めた支援者間のネットワークを構築。定期的に情報共有する機会を設けています。ブックスタートの事務局である図書館もこの連携の輪に加わり、活動への理解を各方面へ広げています。こうした横のつながりが、ブックスタートを、そして地域の子育て環境の充実を支えています。

ブックスタート関係者の
知識を深める

保健センター、保育子育て支援課、ボランティアを集め、年に1〜2回ブックスタートの全体会を開催する上では、図書館の役割です。実施する上で

VOICE



健康福祉部
子育て支援担当主幹
阪本 好美さん

ブックスタートは子どもの権利に沿った事業

泉南市は子どもと保護者に対し、生まれた時から就学前、小・中・高校と切れ目のない支援を、そして縦割りをなくし、公・民を含めた各分野と一緒に取り組むことによる、偏りのない支援を目指しています。なぜならすべての子どもが、地域の人たちにあたたかく見守られながら成長できるまちでありたいからです。その最初がブックスタートでの親子との接点。だからこそ大切に取り組むべき事業だと考えています。

一方で、この活動を「うちの課のことじゃないから関係ない」とか、「私は子どもがいないからよくわからない」と考える人もいるかもしれません。でも、視点を変えて「子どもの権利に沿った一つの事業」と捉える人が、職員や市民の中に増えていってほしい。そうした意識の啓発が、今後の課題だと感じています。

おわりに

すべての子どもを尊重し、心健やかに育つことを子どもの権利と捉え、実践に活かしている泉南市の取り組み。ブックスタートは、絵本を介したコミュニケーションの楽しさを伝えるとともに、子どもたち一人ひとりを大事に思っているという地域からのメッセージを、すべての親子に伝えられる貴重な機会でもあります。そうした視

点で事業を捉えようと、新たに見えてくるものもあるのではないのでしょうか。



泉南市のみなさん

「笑顔」と「言葉」に 心を込めて活動しています

愛知県岡崎市ボランティア **霜田 美津子**さん

プロフィール：岡崎市ブックスタート・ボランティア「りぶらっこの会」代表。
長年、小学校や図書館などでの読みきかせ活動に携わり、子どもたちの健やかな育ちを応援している。



『PEOPLE』では各地の皆さんにブックスタートや親子への思いをお聞きます。今回は岡崎市で2010年の事業立ち上げ時から活動に携わる、霜田さんにお話を伺いました。

あたたかいお出迎えを心がけて

ブックスタートの会場では、親子をあたたかく迎えられるよう心がけています。思想家の鶴見俊輔氏は、赤ちゃんとの時間を「神話的時間」という言葉を用いて表現しましたが、赤ちゃんは「文字」の前にも「言葉」を持っていて、私たちがかける言葉に全身で向きあってきます。その中で楽しい体験ができた時、赤ちゃんは笑顔になるのでしょうか。ですから、保護者はもちろん赤ちゃんに対しても、心からの笑顔とあたたかな言葉かけを大切にしています。

「来てよかった」と思ってもらえるように

ブックスタートではたくさんの親子に出会います。乳児院の先生と思われる方が、愛情いっぱい赤ちゃんを抱っこしていらっしゃることもありますし、片言の日本語で私たちと会話をし、赤ちゃんと絵本を楽しんでお帰りになる方もいます。ひとり親のお父さんが赤ちゃんを連れて来られたこともありました。帰り際、「がんばります」と言って会場を後にした背中に、「お幸せに」と拍手を送りました。

子育て世代の人たちは、皆、忙しいのが現状です。なかには稀にですが、「子どものことは保育園に任せています」という方もいらっしゃいます。こんなときだからこそ、ブックスタートは大事だと思うのですが、思いがうまくかみあわずに、難しさを感じることもあります。ですが、どの親子にも「来てよかった」と思ってもらえるように、みんなで精一杯活動しています。

嬉しい連鎖が生まれています

あるとき図書館で赤ちゃん連れのお母さんに声をかけられ、驚いたことがありました。ブックスター

トで対応した私の名前を、そのお母さんは覚えていてくれたのです。多くの親子に接しているのでも、こちらは記憶に残っていないこともあるのですが、お母さんにとっては、子を持つ親として、親族以外で最初に出会う社会人(?)なのですね。身の引き締まる思いがしたのと同時に、このボランティアをしていてよかったと思いました。

赤ちゃん向けのおはなし会も大変盛況です。最近では、ブックスタートを受けたお母さんが、図書館ボランティアとしても活躍しています。こうした連鎖は本当に嬉しいですね。

事業の趣旨を大切に伝えていきたい

ブックスタートのことは保護者の間でよく知られるようになりましたが、一方で、「本がもらえる」という部分ばかりが強調されてしまうことを憂慮しています。赤ちゃん一人ひとりに向けた、心のこもったプレゼントであることや、本を読む(read books)ではなく、楽しいひとときを分かち合う(share books)ためのきっかけを届ける活動であることを、皆で確認しながら、対応を考えていきたいです。

ブックスタートは、絵本をお渡しして終わりではありません。現在行っているおはなし会のほかにも、絵本に関する相談をもっと気楽にしてもらえる機会を設けるなど、より良いフォローアップ事業のあり方を模索し、実現していきたいと考えています。



岡崎市ボランティア「りぶらっこの会」の皆さん。年4回の例会で、疑問や喜びの体験を皆で共有し、活動の充実を図っています。